



図版5 斎藤義重《内部》(部分)1981年、ラッカー・木・ボルト・紐、サイズ可変、横浜美術館蔵 撮影：加藤健
Saito Yoshishige, *Inside* (detail), 1981, lacquer, wood, bolt and rope, dimensions variable, Yokohama Museum of Art, Photo: Kato Ken

1960年代の横浜における美術館構想 —横浜美術館コレクション展「ヨコハマ・ポリフォニー： 1910年代から60年代の横浜と美術」補論

片多 祐子

序

開館以来はじめての改修工事による長期休館を前に、横浜美術館では2020(令和2)年11月から翌年2月に、コレクションを生かした2本の展覧会を同時開催した。公立美術館3館の連携による企画展「トライアローグ：横浜美術館・愛知県美術館・富山県美術館 20世紀西洋美術コレクション」と横浜美術館コレクション展「ヨコハマ・ポリフォニー：1910年代から60年代の横浜と美術」である。後者の企画にあたっては、前者との対比や、その補完を念頭においた。横浜美術館のコレクションの収集方針には、「横浜開港当時のヨーロッパ近代美術と日本近代美術の相互影響の足跡がたどれる作品」¹との一節がある。そのため企画展において20世紀西洋美術の歴史が語られるならば、コレクション展においては同時代の日本近代美術の動きを示す必要性を感じた。そして美術館のリニューアルという節目に、地元の横浜に目を向けたいと考えた。そこで「鼎談」を意味する「トライアローグ」に想を得て、横浜ゆかりの美術家たちの声や創作に耳を傾けることを企図し、多声音楽を意味する「ポリフォニー」という言葉をタイトルに掲げた。

「ヨコハマ・ポリフォニー」展で横浜をテーマに据えたことには、再開館に向けてこの地における横浜美術館の立ち位置について改めて確認したいとの目論見もあった。しかし同展では、時代区分を設けたことと、所蔵品を出発点とし物理的な諸条件のもとに構成したことで、現在の美術館の成り立ちに関わる問題にまでは触れられなかった。そこで本稿では同展の概要を記した上で²、展覧会においては十分に語りきれなかった60年代に胚胎した横浜現代美術館構想について補いたい。この構想は横浜市の施策の中でどのように具現化されたのか。そして1989(平成元)年に開館した横浜美術館とはどのような関係にあるのだろうか。横浜美術館が現代美術のみならず近代美術にも活動の軸足をおいてきたことで、60年代の構想と横浜美術館の繋がり、これまであまり認識されてこなかった³。しかし両者の関係を紐解くことは、横浜の地における美術館の役割を知る上で何らかの示唆をもたらしてくれるに違いない。そしてこれらの問いに向き合うことは、美術館の立ち位置を見つめ直そうとした、同展の当初の目的にも適うものであるだろう。

はじまりとおわり：激動の60年

20世紀西洋美術の流れと相対させ、横浜と美術の歴史をたどるには、どのような時代設定がよいだろうか。西洋美術が横浜に移植されたのは、1859(安政6)年の横浜開港後の幕末明治期とされる。イギリスから来日したチャールズ・ワグマン(Charles Wirgman)が1861(文久元)年から91(明治24)年まで横浜居留地に滞在し、

そこで高橋由一や五姓田義松らが西洋の絵画技法を会得したことは、日本洋画草創期を語る上で重要な転機のひとつだ。横浜美術館では「幕末・明治の横浜展 新しい視覚と表現」(1999年)や「大・開港展」(2009年)など開港期の横浜を主題にした企画展やコレクション展を通じこの時代の美術を紹介してきた。

一方で、由一や五姓田派が活躍した幕末・明治時代では、西洋絵画の技術が、江戸時代の文化や複製技術と地続きの中で受容された。そして日本において、西洋由来の「美術」という概念そのものや、20世紀美術の動向に通底する思想となるモダニズムへの理解が深まるのはもう少し時代が下ってからである。それは、複製技術の急速な発展により普及した雑誌というメディアを通し、西洋美術の動向がすばやく日本へ伝えられるようになったこととも深く関係している。そこで本展では、その象徴として横浜生まれの画家・有島生馬と彼が活躍した雑誌『白樺』に着目し、展覧会の起点を『白樺』創刊年にあたる1910(明治43)年に定めた。有島は、ポール・セザンヌ(Paul Cézanne)の存在を日本に知らしめた人物としても知られる。その功績もあって、明治末期から大正期の日本人画家のセザンヌへの傾倒ぶりは、「極東の青年画家を狂わせしめざれば止まざらんとする程の勢」⁴と表現されるほどであった。こうした当時の熱狂ぶりを踏まえ、本展では序章を「憧れの西洋美術」と題し、セザンヌによる夫人像と、有島がセザンヌからの影響も受けた後、滞仏中に描いた女性像を冒頭に飾ることにした(挿図1)。そして先ごろ創立100周年を迎えた横浜美術協会が1919(大正8)年に組織されたという意味においても、1910年代は横浜において近代美術を志す作家たちの自律的な動きが萌芽した時代と言える。

対する展覧会の終着点は、横浜美術館の誕生を予感させる時代までを射程に入れたいと考えた。そして、1964(昭和39)年開館の横浜市民ギャラリーで始まったアニュアル形式の現代美術展「今日の作家展」を横浜美術館誕生の布石のひとつとして位置づけることにした。その理由や時代背景は本稿後半で述べたい。こうして本展では、横浜美術館のコレクションを拠りどころとしながら、およそ60年間にわたる横浜と美術の歴史



挿図1 「序章 憧れの西洋美術」展示風景

をたどることにした(表1)。1910年代から60年代の間、日本では明治から大正、さらには昭和と元号が変わった。そして横浜にとってこの60年間は、関東大震災と第二次世界大戦により2度にわたって灰塵に帰し、そこから復興を成し遂げた激動の時代であった。この時代は、コレクションによってどのように語ることが出来るのであろうか。次に本展の構成について概括したい。

「ヨコハマ・ポリフォニー」展概観

展覧会の章構成にあたっては、まずコレクションの中でも厚みのある作品群を抽出し、各作品群に見出せる横浜との繋がりをテーマとして立ち上げ、時代順に並べるという手順をとった。また、各章に含まれる横浜ゆかりの作家たちに、その章の代表的な語り部としての役割を担ってもらうべく、彼らの証言をピックアップし、それらを切文字で展示することにした(挿図2)。下記に、10章からなる章構成について、各章における横浜との接点に焦点を定めながらその概要を記す。

「第1章 横浜美術協会創設前後－川村信雄とその周辺」では、洋画家・川村信雄の歩みを中心に据えた。川村は、岸田劉生とフェウザン会を結成し、同会解散後に横浜へ移り住んだ。そして1919(大正8)年に横浜市商



挿図2 「第1章 横浜美術協会創設前後－川村信雄とその周辺」展示風景

工課が主導した横浜美術協会の発足に携わった⁵。また川村は、横浜弘明寺に戦前の横浜では唯一であったという画塾も開設し、多くの後進を育てた功績も大きい⁶。

「第2章 フランスへの旅立ち」では、海外との窓口として機能した横浜港から、多くの美術家が留学に旅立ったことに焦点を当てた(挿図3)。とりわけ1910年代から30年代にはフランスへ旅立ち、パリで学んだ作家が多くあり、その代表として1913(大正2)年に渡仏した藤田嗣治や、1918(大正7)年に渡仏した横浜生まれの長谷川潔らを紹介した。

「第3章 関東大震災からの復興」では、1923(大正12)年9月に発生した震災により横浜が受けた壊滅的な被害



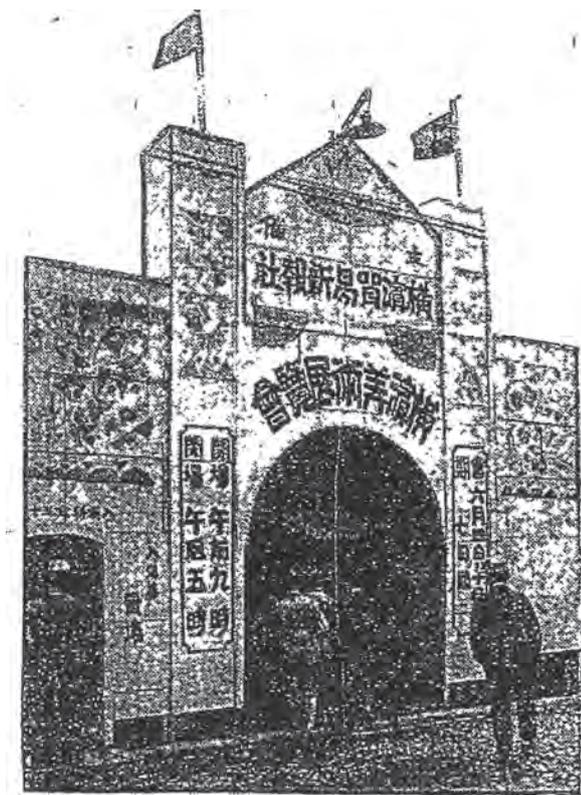
挿図3 「第2章 フランスへの旅立ち」展示風景



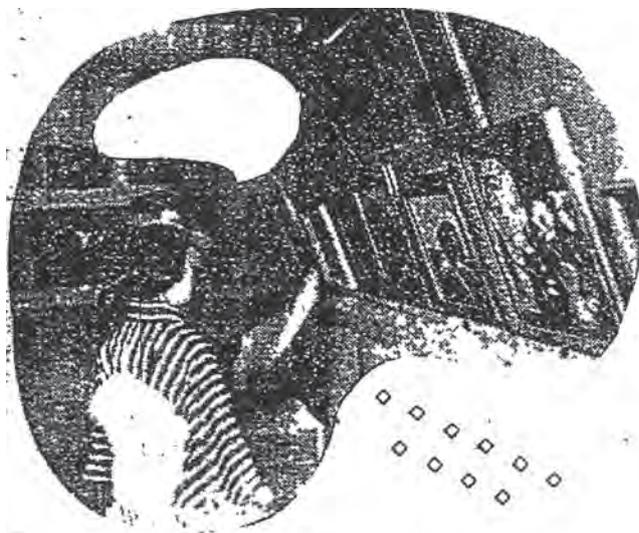
挿図4 中島清之《関東大震災画卷》(部分)1923年、紙本淡彩・卷子、27.8×770.5 cm、横浜美術館蔵、中島清之氏寄贈

を描き留めた作品を展示した(挿図4)。加えて、この章では震災から2年後の1925(大正14)年6月に、桜木町駅前の仮市庁舎跡で開かれたふたつの展覧会に着目した⁷。第一に、神奈川新聞社の前身にあたる横浜貿易新報社が「芸術的復興の門出」⁸として「復興横浜の新意気を表現」⁹するために企画した第1回横浜美術展覧会である¹⁰。ここでは同展を報じた新聞記事の複製も掲出した(資料1、2)。また第二に、フランス人美術商のエルマン・デルスニス(Herman d'Oelsnitz)が創業した日仏藝術社による、横浜での初の本格的なフランス美術展「仏蘭西現代絵画展」¹¹であり、同社主催の展覧会活動の資料も展示した(挿図5)。

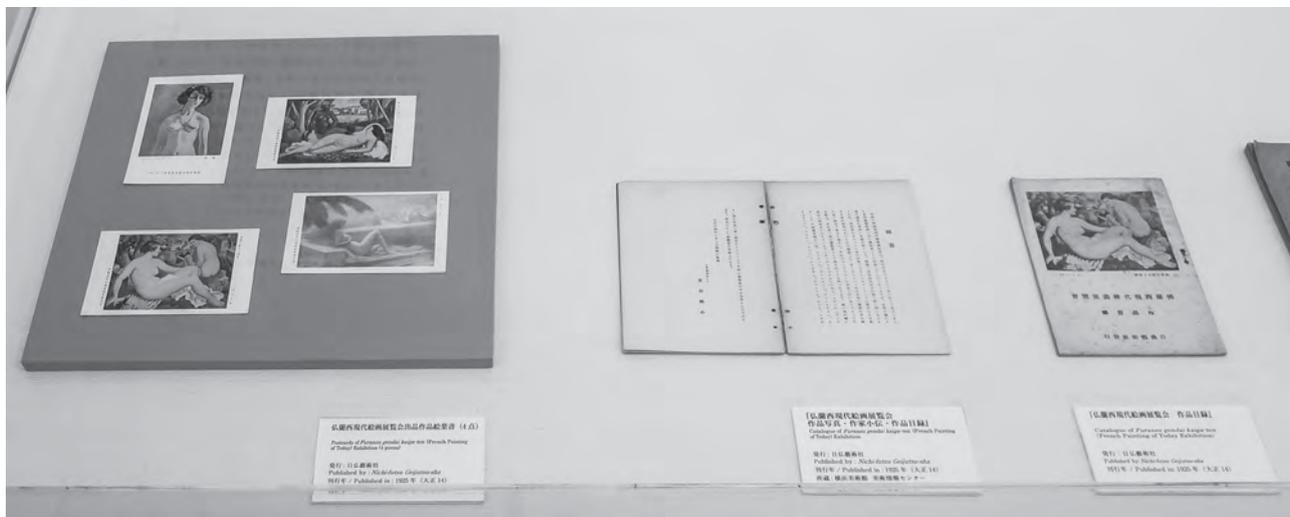
「第4章 新版画の興隆－鏑木清方から石渡江逸まで」では、新版画を創始した版元の渡辺庄三郎が、そのキャ



資料1 第1回横浜美術展覧会入口(「ゆったりとした気分で熱心に鑑賞」『横浜貿易新報』1925年6月6日)



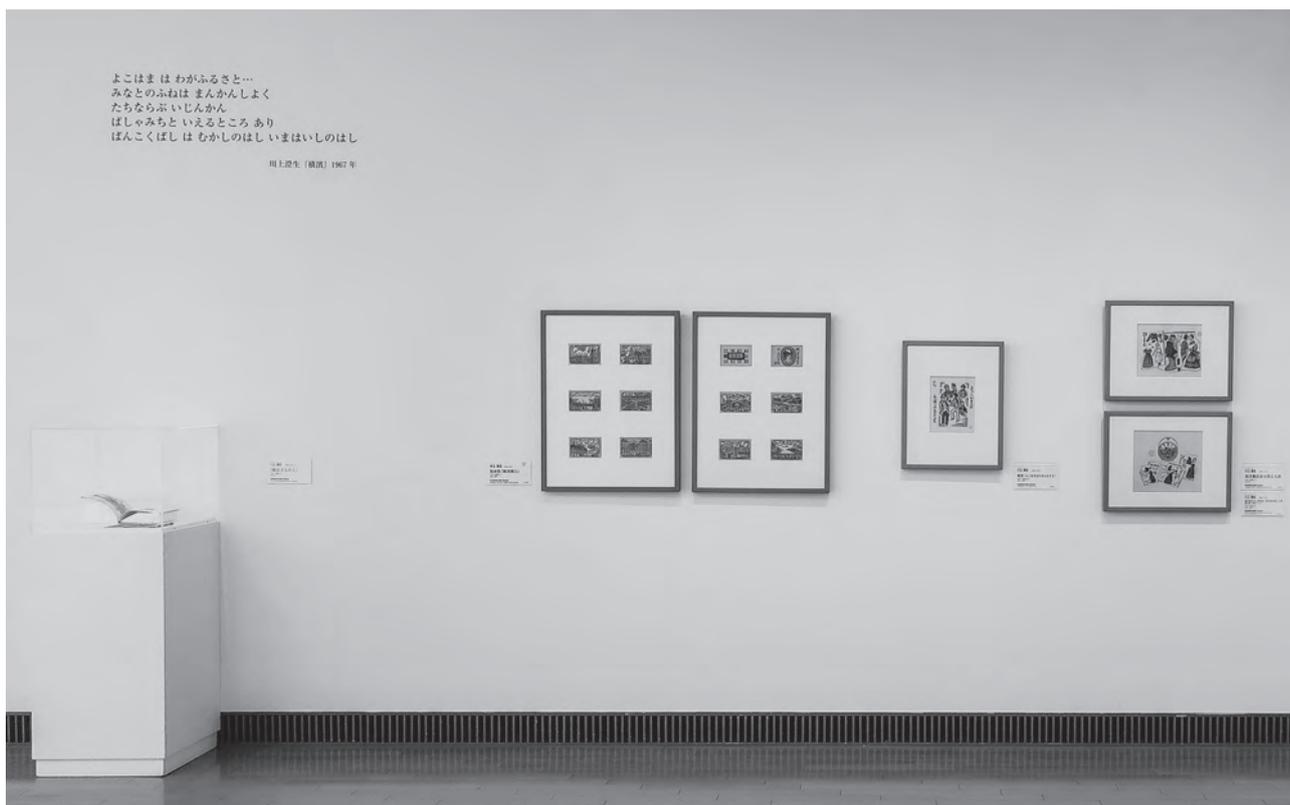
資料2 第1回横浜美術展覧会会場内風景(「快晴に祝福されて本社主催美術展覧会開く」『横浜貿易新報』1925年6月5日)



挿図5 「仏蘭西現代絵画展」関連資料展示風景

リアの出発点に浮世絵商・小林文七の蓬枢閣横浜支店で務め、主に外国人に対して浮世絵を販売したことに着目した¹²。その横浜支店に広重の古版木が持ち込まれ、海外向けの復刻を依頼されたことが契機となり、渡辺は技術の継承が危ぶまれていた錦絵の復興へと踏み出している。ここでは、渡辺と協同した画家たちの系譜を辿り、伊東深水の師匠で横浜・金沢に別荘「遊心庵」を構えた鏑木清方から、川瀬巴水の門下で横浜に住みこの地の風景に取材した石渡江逸までを紹介した。

「第5章 横浜懐古－川上澄生の世界」では、1895(明治28)年に横浜紅葉坂に生まれた川上澄生の版画に焦点を当てた(挿図6)。幼くして転出したものの、横浜の地は川上にとって重要なモチーフであり続けた。この章では、一貫して異国的なるものへの憧れを主題に取り組んだ、その創作を展観した。



挿図6 「第5章 横浜懐古－川上澄生の世界」展示風景



挿図7 奥村泰宏《ベビーブーム》1950年(1988年プリント)、ゼラチン・シルバー・プリント、40.0×46.7cm、横浜美術館蔵



挿図8 常盤とよ子《待合室》1956年(1988年プリント)、ゼラチン・シルバー・プリント、32.8×49.8cm、横浜美術館蔵、常盤とよ子氏寄贈



挿図9 「第7章 ニューヨークでの活躍－岡田謙三とイサム・ノグチ」展示風景、撮影：加藤健

「第6章 横展写真部創設」では、第3期となる横浜美術展覧会(通称・横展)に写真部が創設されたことに光を当てた¹³。これは、福原信三や野島康三らによる国画会写真部創設にも先行し、全国の美術団体に先駆けた動きであった¹⁴。本展では、戦後のハマ展写真部で活躍することとなる錦古里孝治や安藤不二夫が、美術としての写真表現を模索し取り組んだ戦前の芸術写真とともに、多数の占領軍兵士が駐留した戦後まもない横浜のありのままの姿が焼き付けられた奥村泰宏(挿図7)や常盤とよ子(挿図8)らの作品を展示した¹⁵。

続く「第7章 ニューヨークでの活躍－岡田

謙三とイサム・ノグチ」では、戦後に美術の中心がパリからニューヨークへ移っていくなかで、同地のアートシーンで名を成した数少ない日本育ちの芸術家となったイサム・ノグチ(Isamu Noguchi)と岡田謙三を紹介した。岡田は横浜市初音町生まれ、ノグチは同市山手町にかつてあったセント・ジョセフ・インターナショナル・スクールに学んでおり、ともに横浜とのゆかりは深い。さらにこのふたりは、1910(明治43)年に南高輪幼稚園と南高輪尋常小学校(いずれも現在横浜市緑区にある森村学園の前身)が開設されると、前者にはノグチが入園、後者には岡田が転入したという縁も持つ。展示では両者の作品を同じ空間に並べ(挿図9)、1950(昭



資料3 岡田謙三とイサム・ノグチ、岡田謙三のアトリエにて、1950年6月30日、撮影：三木淳

和25)年、岡田の渡米直前に撮影されたふたりの写真もパネルで掲示した(資料3)。

「第8章 前衛美術のパイオニア—斎藤義重」では、1930年代頃より半立体的な抽象表現を手掛け始め、戦後には国内外で活躍した斎藤義重を取り上げた。「もの派」を中心に多数の後進を育て、戦後美術を牽引した斎藤は、1961(昭和36)年に横浜へ転居し、翌々年にアトリエ併設の終の住処を南区六ツ川に構えた。本展では、斎藤によって戦後に再制作された1930年代の作品とともに、「今日の作家81年展」のために制作された《内部》を展示した(図版5)。

「第9章 ハマ展の洋画家と彫刻家」においては、章の冒頭に戦後直後に描かれた兵藤和男《自画像》を据えた(挿図10)。作者自身が「罹災者で生活一変の暗い日常ながら、戦い、凶らずも死を脱した二十五才の混沌の前途に何か屈折した、しかし強烈な光も感じ得た青春」¹⁶と述べたその作品には、敗戦直後の日本人の絶望とともに、未来へ託した希望が映し出されている。本作が描かれた翌年6月には、震災や戦争により中断しながらも継続されてきた横浜美術協会による横浜美術展覧会がハマ展として復活を遂げた。そして、このハマ展出品作家の中には、制作の拠点は横浜にありながらも、東京の画廊や美術団体にも所属し、精力的に活動する作家もいた。そうした熱気の中、洋画家・山中春雄と兵藤の発案により、1950(昭和25)年には無鑑査の第1回神奈川アンデパンダン展が野毛山科学館跡にて開催された¹⁷。

50年代の横浜では、戦後復興に伴い画廊や百貨店といった発表の場も増えていった。例えば、終戦に伴い店舗敷地が進駐軍に接収されていた有隣堂は、1956(昭和31)年になって伊勢佐木町通りに、ギャラリーを設けた専門店ビルを完成させた。同じく進駐軍に接収されていた株式会社松屋の横浜支店が1953(昭和28)年に接収解除によって再開、さらに1959(昭和34)年には横浜高島屋が新設された。こうした商業施設では展覧会が顧客動員の施策のひとつとして盛んに開かれ、作家たちに作品発表の場を提供した。加えて1961(昭和36)年には、江見絹子や竹中恵美子らによって神奈川県女流美術家協会が結成され、女性作家が活躍する場も育まれた。

そして最終章では、60年代の「今日の作家展」に参加した作家の所蔵品を展示した¹⁸(挿図11)。この章の時代背景は、次項で述べる。

このように60年間という区切りを設け、横浜と関わりのあった作家たちに焦点を当てながらその活動を概ね編年的にたどってみると、横浜では、東京を中心とした美術史の大きな流れと連動した多様な表現が生み出されたことが分かる。同時に彼らの連綿とした営みからは、1919(大正8)年の横浜美術協会発足後、美術家たちがさまざまな形で発表の場を求めた様相も透けて見えてくる。横浜ではこの間、進取の気性に富んだ港町ならではの個性ゆたかな才能が多く生まれ、人的ネットワークが形成され、さらには彼らの創造的な営為を支える環境もまた育まれていったのである。



挿図10 兵藤和男《自画像》1945年、油彩・カンヴァス、43.5×36.0cm、横浜美術館蔵、兵藤敏枝氏寄贈



挿図11 「第10章 『今日の作家展』」展示風景

「ヨコハマ・ポリフォニー」展補遺 1：横浜現代美術館構想

ここからは同展の補遺として、展覧会では語り得なかった横浜現代美術館構想について、残された資料を整理し、その経緯を確認したい¹⁹。前項で触れた通り戦後になって小規模な展示会場は増えたものの、ハマ展をはじめとする団体展の安定した継続開催のために、作家たちはより広い恒常的な会場を必要とした²⁰。その強い要望を受け、東京オリンピック開催間近の1964(昭和39)年4月、桜木町駅前の旧中区庁舎に、市民の創作発表を主目的とした横浜市民ギャラリーが開設された。その開設からまもない同年6月以降、横浜現代美術館の設立に関するニュースを複数のメディアが報じていることが目を引く。たとえば同年6月1日付けの『毎日新聞』では、「『横浜現代美術館』設立へ」という見出しのもと、次のように報じた。

横浜市は横浜現代美術館設立の準備を進めているが、その前ぶれとして「今日の作家64年展」(六月十七日から七月八日まで)「全日本アンデパンダン展」(七月十一日から三十日まで)を、桜木町駅前の市民ギャラリー(旧中区役所)で開く。

現代美術館設立については、美術評論家の針生一郎、東野芳明、滝口修造、中原佑介、瀬木慎一氏らが準備委員となり、候補地を捜し、ここ二年以内に東京上野国立西洋美術館級の規模のものをつくるように考えている²¹。

「今日の作家展」は、当時第一線の美術評論家が推薦する気鋭の作家が作品を発表し、日本の現代美術界の登竜門として重要な役割を担った。ここでは、その選考委員会が横浜現代美術館開設準備委員の役割も担っていたこと、美術館の設立目標が2年後とかなり直近であることが報じられている。同年6月27日付けの『朝日新聞』紙上に掲載された「今日の作家64年展」の紹介記事も、「ゆくゆくは、横浜現代美術館の開設をも計画しているというが、とにかく、このギャラリーは現代美術に対する市当局の意欲の最初のあらわれ」²²と、現代美術館開設が仄めかされる。

また同年7月の『みづゑ』でも、「横浜現代美術館設立問題」が取り上げられる。この記事は、前年に第17代横浜市長となった飛鳥田一雄が「横浜現代美術館をつくります」と公約したと述べ、その発言を「快挙」と高く評価する²³。そして、準備委員が「現代美、なかんづく反芸術とかアバンギャルドの理解者たち」であることに注目しつつ、同時に現代美術は「スポンサーがつきにくい」ことを難点とした上、「横浜市民の進取性、もしくは度量と寛容の精神如何にカギがかかっている」と文章を締めくくる²⁴。

ここで指摘されるように、当時はまだ現代美術が社会に受け入れられ、市民権を得ていたとは言い難い。それにもかかわらず、横浜ではなぜ現代美術館が構想されたのであろうか。ここでは当時の現代美術をめぐるいくつかの動きに着目したい。

ひとつ目は、東京における「読売アンデパンダン」展の中止である。1949(昭和24)年に、無審査で自由出品形式の年次展覧会「日本アンデパンダン」展として始まった同展は、主催者の読売新聞社の名を掲げ「読売アンデパンダン」展と改称された後も、公募団体に属さない作家たちの重要な発表の場として機能した。とりわけ1958(昭和33)年開催の第10回展以降、不快な音や悪臭を放つ作品や、公衆衛生を乱す表現など、既存の美術を逸脱しようとする表現の傾向が顕著となり、会場であった東京都美術館による作品撤去の事態も生じた。東野芳明によって「反芸術」と評されたこうした表現はやがて大きな潮流となり、東京都美術館は「陳列作品規格基準要項」を制定した。しかし状況は変わらず、1964(昭和39)年の第16回展の開催直前には、主催者によって中止が通達されるに至った。こうした中、現代美術の創作の担い手や彼らを擁護する批評家たちからは、近代美術を扱う保守的な美術館ではない、現代美術に特化した発表の場を求める声が強くなった。

さらに、同年日本で初めて館名に「現代美術」を掲げた長岡現代美術館が開館したことも無視できない。横浜現代美術館開設準備委員の針生は、私設の現代美術館の登場は、「各地に反響をよびおこし」、足利市や新潟市でも現代美術館建設の構想が持ち上がったと述べる²⁵。そして針生は、横浜市に至っては「すでに建設敷地も内定」したと証言している²⁶。

またこれらの当時の報道を裏付けるかのように、同準備委員のひとりの中原は、後年になって「今日の作家展」の開催委員についての質問に次のように答えている。

われわれ『横浜現代美術館開設準備委員』という肩書をもって、飛鳥田さんも出席されて、どういう美術館を作ればいいのかという話を何回かやりまして、そのつなぎという言い方はおかしいのですが、実際に美術館が設立されるまで、桜木町の旧中区役所の建物を現代美術館の前段階の施設として使おうということだったわけです。(中略)飛鳥田さんは非常に文化に興味を持たれる方だったので、単なる美術館というよりも、現代美術ということにアクセントをおいて発想されたわけで、われわれもそういうことに非常に共感したわけです²⁷。

この中原の証言からは、横浜現代美術館開設準備委員の会合が飛鳥田も同席のもとに複数回行われたこと、そして「今日の作家展」は、当初は「前段階」として横浜市民ギャラリーを会場に開催されたが、やがては新たに設立されるはずの美術館での開催が目論まれていたことが分かる。すなわち中原の言葉を借りれば、「今日の作家展」には、横浜市民ギャラリーから横浜現代美術館開設までの「つなぎ」としての役割も期待されていたようだ。そして現代美術館という発想が「単なる美術館」とは一線を画すように言い表されていることに注目される。この表現は、近代以前の作品を収集対象とした当時の他の多くの美術館の状況を逆説的によく映し出す。さらに飛鳥田自身も、「今日の作家展」の開催そのものや、新進気鋭の美術評論家たちと意見交換することで、現代美術に対する理解を深めていったであろうこともまた推察される。

当時の美術をめぐるこうした状況を顧みると、60年代は、既存の美術の枠組みを逸脱する表現が生まれた一方で、それを支える新たな制度も必要とされた時代であったと言えるだろう。そうした風潮が飛鳥田の革新的な思想や政策方針にも合致したことで、横浜市民ギャラリー開設と「今日の作家展」の始動が実現され、その先に横浜現代美術館開設が構想されていたようだ。

「ヨコハマ・ポリフォニー」展補遺 2：横浜の都市計画と美術館

さて各メディアから注目を浴びた横浜現代美術館構想は、横浜市の実策としてはどこまで具現化されたのであろうか。次に、飛鳥田が推進した横浜市の都市計画と、美術館構想の接点を探ってみたい。

日本では第二次世界大戦後の復興の中で全国的な国土開発が目指される中、各地方自治体による長期的な都市計画が練られていった。横浜市においては、1950(昭和25)年に制定された横浜国際港都建設法に基づき、用途地域計画、用地用水、交通運輸などを含めた都市の基本インフラの整備のため、1957(昭和32)年に「横浜国際港都建設基幹計画」が策定された。

しかしその後、高度経済成長期に突入し、横浜市は急激な人口増加と経済成長を迎えると、基幹計画作成当時には予測ができなかった都市公害、犯罪の増加、交通難、福祉施設や社会施設の未発達といった諸問題が60年代になって表面化していった。そのため1964(昭和39)年10月に、社会福祉部会、都市衛生部会、教育文化部会の3部からなる横浜市福祉計画策定研究調査会が立ち上がり、「横浜国際港都建設総合計画」のうち「福祉計画(素案)」が作成された。そしてこの素案の「社会教育施設の充実」という項目の中に、公民館、図書館、博物館、音楽堂、文化会館、社会教育研修センター(教育館)、勤労青少年センターとともに、美術館の記述も見られる。少し長くなるが以下にその計画を引用する。

ここにいう美術館は博物館法第2条に規定される博物館のうち特に美術に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮のもとに一般公衆の利用に供する機関をさすもので、本市においては昭和39年に横浜市民ギャラリーの開設をみたが、これは単に展覧会場としての性格をもつものである。しかしながら、会場難に苦しむ美術、その他の関係者にとっては、唯一の拠点を果たしたことになり、芸術活動仲展のために資するところ大である。本県の美術館としては、県立近代美術館があるが、願わくは市民のために美術[の]殿堂として、古代[、]現代美術品を鑑賞しうる美術館を建設し展覧会場を併設、市内

美術家の作品買上等の積極的方向に進むことは、本市文化の向上発展のために大切である²⁸。

ここからは、横浜市が発表の場としての市民ギャラリーとは別に、コレクションを収集、保管し、公開する機能を備えた美術館設立の構想を抱いていたことが分かる。そして構想にあたっては、1951(昭和26)年に日本で最初の公立近代美術館として鎌倉に開館した神奈川県立近代美術館との差別化も意識されたことが読み取れる。そのことを反映するかのよう、横浜市の美術館では、「近代」を除く、「古代」と「現代」の美術品を対象と定めたようだ。そして収集にあたっては「市内美術家の作品買上」が想定されており、市内在住作家の作品の収蔵が念頭にあったことが示唆される。

同計画は、1965(昭和40)年4月に「福祉計画(原案)」として改訂され、青少年センターや図書館、文化会館と植物園などの新設、既存の野毛山動物園や三溪園の整備とともに文化の向上を担う施設として、「博物館併設」の美術館建設の計画も記載される²⁹。基本的な構想は素案のままに、用地が8,250㎡、2階建の床面積が9,900㎡、総事業費として11億円が算出され、より具体化されたことが分かる³⁰。そしてこの美術館設立を含む計画は、「都市生活における人間性の回復、すなわちすべての市民が人間らしく生きられる都市環境をつくる」³¹ことを目標に掲げ、「横浜国際港都建設総合計画」として同年に策定された(資料4)。

しかし手広い事業が華々しく構想された同計画は、策定からほどない1969(昭和44)年には、「横浜国際港都建設中期計画」によって規模が縮小されてしまう。この中期計画は「総合計画の成果を率直に反省し、あらゆる施策を現時点に立ってその必要性・重要性・緊急性を再検討し、再編成したもの」であり、文化施設に関わる計画も図書館や三溪園の整備のみに絞られ、美術館設立の計画も除外された³²。

この「横浜国際港都建設総合計画」の中で目指された美術館が、前項の横浜現代美術館構想と同一であると明示された記述は今のところ見当たらない。しかし各メディアが後者を報じてから、わずか4ヶ月後に前述の「福祉計画(素案)」が作成されており、古代との併記ではあるものの当時は珍しかった「現代美術品を鑑賞する美術館」と明記されていることから、両者は飛鳥田の同じ構想をもとにした計画とみるのが自然であろう。

このように一度は計画から除外された美術館構想であるが、やがて飛鳥田が推進した別の横浜市の施策と結びついていくこととなる。それは、1965(昭和40)年に飛鳥田が都市づくりの具体的な戦略事業として提案した「6大事業」である。この大規模な都市計画は、戦争とその後の米軍の接収により荒廃した横浜市の都市基盤の整備を推進するための6つの事業で構成されており、そのうちのひとつが横浜駅周辺と関内地区を一体化させることを目論んだ都市部強化事業であった。本事業は1980年代以降、現在「みなとみらい21」と呼ばれるようになった地区の開発と造成として本格化するが、当該地区の文化拠点のひとつとして構想されたのが横浜美術館であった³³。



資料4 『横浜国際港都建設総合計画 1965-1975』表紙

結

1981(昭和56)年6月に横浜市美術館基本構想委員会が設置されて第1回会合が開かれ、翌年3月に「横浜市美術館の基本構想のあり方について」の答申が出された³⁴。この答申で示されたのが、本稿冒頭においてその一節を引用した現在の横浜美術館の収集方針である³⁵。そこでは収集対象の時代区分が、1859(安政6)年の「横浜開港」期から「現代美術」まで、すなわち近代から現代と規定された。そして同方針は、「横浜国際港都建設総合計画」の中で謳われた美術館とも目指すところの一部を共有し、「横浜ゆかりの代表的作家の作品」という一節も含む。この方針に基づき開館以降、横浜美術館の収集活動が積み重ねられてきたのであり、言うまでもなく「ヨコハマ・ポリフォニー」展もそのコレクションを活用した事業のひとつである。

本稿で確認してきたように、飛鳥田は1964(昭和39)年に横浜現代美術館構想を抱き、同年に作成され始めた「横浜国際港都総合計画」にも、一時は美術館設立が組み込まれていた。この計画はすぐには実現されなかったものの、ほぼ時を同じくして提案された6大事業の延長線上に、後のみなとみらい21地区の開発があり、美術館は同地区の拠点のひとつに据えられた。つまり、飛鳥田が「二十年、三十年たつと将来初めて美術館をつくり得るかもしれない」³⁶との信念を60年代半ば以降持ち続け、その意志が1978(昭和53)年に次代市長となった細郷道一に引き継がれたことで、横浜美術館開館が成し遂げられたとも言えよう。すなわち、一見すると横浜現代美術館構想は60年代に断絶したかにも見えるのであるが、横浜の都市計画の進展を補助線として60年代から80年代の美術館構想を捉えなおすと、そこにはひとつの連続性が見出せる。「ヨコハマ・ポリフォニー」展では、横浜美術館のコレクションを通じて、異文化の窓口となった開港地に培われた、開かれた精神の発露とも言うべき作家たちの創作や活動を60年間という時代区分を設けて見てきた。さらに本稿で60年代以降の美術館構想の連なりを確認したことで、横浜美術館もまた同じ風土の中で作家たちによる創作活動の蓄積の上に育まれてきたひとつの組織であり、同時にこの土地の美術にまつわる記憶をアーカイブし、発信していく装置であるとの性格が改めて認識される。

一方で同展では、コレクションの特徴を踏まえて構成したため、横浜と美術の歩みのごく一部を垣間見たに過ぎない。コレクションの中でも日本画をはじめとし、掬いきれなかった動きも多く、偏りがある。また横浜と一口に言っても、新興地区であるみなとみらい21地区から見えるこの土地と、開港以前からの歴史を持つ場所から眺めた横浜は、また別の姿をしているはずだ。言い換えれば、コレクションから紡ぎ出せる土地の語りは幾通りもあるはずで、今回はそのうちのひとつの試みでしかない。リニューアル後もこの地における美術館の立ち位置を時に振り返り確かめながら、この場所から新たな歴史が紡がれてゆくことに期待したい。

(横浜美術館主任学芸員)

- 1 横浜市美術館基本構想委員会「横浜市美術館の基本構想のあり方について」1982年3月18日、1頁。
- 2 同展の概要と章立ては、『令和2年度 横浜美術館年報』(横浜美術館編集・発行、2021年、16-17頁)に掲載されているが、他の近年のコレクション展と同様に図録や小冊子は作成していない。出品リストについては、公式ホームページに掲載されているので、ここでは割愛する。<https://yokohama.art.museum/exhibition/archive/2020/20201114-568.html>(参照2021-11-10)
- 3 たとえば横浜現代美術館設立準備委員のうち唯一、横浜市美術館基本構想委員会も務めた中原佑介は「飛鳥田さんの『現代美術館構想』というのは、市長をお辞めになったから立ち消えになって、美術館はまったく別の形で実現したと述べる。中原佑介・針生一郎・石川美枝子「第1部 1964-1976座談会 70年代中頃までを振り返って」今日の作家展1964-1989編集委員会・横浜市民ギャラリー編『今日の作家展：1964-1989』横浜市教育委員会、1990年、23頁。
- 4 「セザンヌを懐ふ」『白樺』第3巻第9号、1912年、191頁。
- 5 横浜美術協会は、当初は手工芸輸出作品の質の向上を図り、図案の美意識の向上を目的に横浜市商工課の主導で1919年に設立された。横浜市商工課は、川村信雄ら市内在住の洋画家に呼びかけ、同年12月に市主催による初の横浜美術展覧会を開催した。しかし第5回展を開いた年に関東大震災が起り中断した。
- 6 「神奈川県名鑑」(横浜貿易新報社、1935年12月、44頁)によると、川村は1927年に横浜市中区弘明寺に美術研究所を開設したと記載される。
- 7 仮市庁舎跡は3代目市庁舎として使用された建物。関東大震災により2代目市庁舎が焼失したことを受け、火災を免れた桜木町駅前に建てらればかりの中央職業紹介所が、震災後2年間、仮市庁舎として使用された。
- 8 「災後初頭の横浜美術展覧会」『横浜貿易新報』1925年4月12日、1面。
- 9 「横浜美術展覧会 出品募集」『横浜貿易新報』1925年4月13日、1面。
- 10 註5に記載した横浜美術展覧会に続く、通称・第2期横浜美術展覧会。横浜貿易新報社社長の三宅磐が川村信雄と日本画家の牛田雞村に相談し、石井柏亭、川端龍子、前田青邨らを審査員に招き、一般公募形式で開かれた。日本画85点、洋画325点の応募があった。
- 11 エルマン・デルスニスは、1922年から31年まで東京と大阪を中心に仏蘭西現代美術展覧会(通称「仏展」)をほぼ毎年開催した。1924年には、黒田鵬心と日仏藝術社を設立、第4回仏展は「仏蘭西現代絵画展」として初の地方巡回をし、4月に福岡、5月に金沢、6月には横浜へと巡回した。
- 12 渡辺庄三郎の経歴については、次の文献を参照。渡辺規編『渡辺庄三郎』渡辺木版美術画舗、1974年。
- 13 註10に記した第2期横浜美術展覧会は、5回展までで終了したため、1932年には、再び市主催による第3期横浜美術展覧会(通称・横展)として再出発した。横展は戦争により10回展で廃止され、戦後にハマ展として再興した。
- 14 横浜美術協会発行の『第76回ハマ展出品目録』(2020年)掲載の「横浜美術協会史」によると、横展は1933年開催の第2回展から、写真部が隣接した会場で作品展を開いたとの記述がある。なお戦後には、1948年開催の第4回ハマ展で写真部も復活した。
- 15 1952年開催の第8回ハマ展写真部会員に、安藤不二夫、錦古里孝治、奥村泰宏の名前がある。横浜美術風土記編集委員会編『横浜美術風土記』横浜市教育委員会、1982年、78頁。
- 16 内山淳子「兵藤和男と山中春雄 青春昂揚の1950-60年代 -戦後ヨコハマに交叉した二つの異彩-」『横浜市民ギャラリーコレクションを中心とする企画展 兵藤和男と山中春雄』横浜市民ギャラリー、2000年。
- 17 神奈川アンデパンダン展は画家たちの仲違いにより2回展で打ち切りとなったものの、新人や無名作家の発掘を意図した革新的な展覧会であった。終了後も、同展を契機に生まれた研究会が母体となり、1954年に神奈川美術協議会主催の全神奈川アンデパンダン展が横浜に生まれ、1963年開催の第10回展まで継続した。
- 18 当館には出品作品そのものの所蔵がないため、出品作家による別作品の展示となった。
- 19 横浜現代美術館構想と「今日の作家展」については、主に次の資料を参照。
中原・針生・石川、前掲書、22-31頁。
- 20 1959年9月から1963年8月まで横浜美術協会の委員長を務めた洋画家・森兵五は、次のように述懐している。「私が横浜美術協会の事務所を担当して(…)困った事のひとつに、作品陳列の会場の無いことでした。(…)そこで事務所を担当して一年ぐらいいったところ、会員のなかからも市へ陳情したらどうかという話も出て、市当局への陳情となりました。当時の幹部のかたがたに面会してお話してみると、くよしわかった。今に立派な美術館を建てましょう。(…)」といっはくれるのですが、何時建てるといことはいっはくれません。(…)「いいえ、そんな立派なものでなくてよいのです。かなり足の便利なところで、美術館というと大変ですからギャラリーでよいのです」といって、「ギャラリーってどんなものですか」という情けない返事だったことを覚えております。『横浜美術風土記編集委員会編、前掲書、118頁。
- 21 「『横浜現代美術館』設立へ 機運盛り上げ二つの展覧会開く」『毎日新聞』(夕刊)1964年6月1日、3面。
- 22 「ビジョン追求の努力 今日の作家64年展」『朝日新聞』1964年6月27日、11面。

- 23 松岡寿衛「美術界展望」『みづゑ』713号、1964年7月、96頁。
- 24 同前。
- 25 針生一郎「はじめて建った私設現代美術館」『芸術新潮』1964年9月号、新潮社、64-66頁。
- 26 同前書、66頁。
- 27 中原・針生・石川、前掲書、23頁。
- 28 横浜市「横浜国際港都建設総合計画 福祉計画(素案)」1964年10月、38頁。[]内は可読性を高めるため、「横浜国際港都建設総合計画 福祉計画(原案)」の記述に合わせ執筆者が補った。
- 29 横浜市計画局「横浜国際港都建設総合計画 福祉計画(原案)」1965年4月、110頁。
- 30 1989年に開館した横浜美術館は、敷地面積が19,803㎡、延床面積26,829㎡であり、1965年に構想された美術館はおおよそ半分の規模であった。一方で、1951年に既に開館した神奈川県立近代美術館の旧鎌倉館は、敷地面積が4,243.12㎡、延床面積1,575㎡であったことを鑑みると、当時としては巨大な施設として構想されたことも理解される。
- 31 飛鳥田一雄「発刊にさいして」『横浜国際港都建設総合計画 1965-1975』横浜市、1966年。
- 32 「横浜国際港都建設中期計画資料」横浜市、1969年3月。
- 33 1981年の「都心臨海部総合整備計画(中間案)」の中には、「都市としてのアメニティを高める(文化、アミューズメントの場の整備-市民文化の興隆)」を整備目標として、「文化施設」として「美術館、博物館、コンサート・ホール、芸術センター」の建設計画が謳われていることが確認できる。横浜市企画調整局都心臨海部総合整備計画担当編「都心臨海部総合整備基本計画」1981年、52頁。
- 34 横浜市美術館基本構想委員会、前掲書。
- 35 同前書、1-2頁。「(1)西洋文化の流入窓口であった横浜開港当時からヨーロッパ近代美術と日本近代美術の相互影響の足跡がたどれる作品」に続けて、「(2)①現代美術の展開と流れの眺観に役立つ作品」、「②今日の美術が内包する問題点を明確に表わしている作品」、「③近代美術の一分野としての写真の代表作品」、「④現代の市民生活に密着した分野(デザイン、工芸、建築、ビデオ)の代表作品」(3)横浜ゆかりの代表的作家の作品、「①岡倉天心との関係を含めて、原三溪に庇護された、日本近代美術の発展に寄与した作家の作品」、「②その他、横浜ゆかりの代表的作家の作品」、「(4)以上の美術に関連する資料」とある。
- 36 飛鳥田一雄・佐々木基一「文化への新しいこころみ」『明日への文化提言』オリジン出版センター、1978年、200頁。飛鳥田は本書のインタビューで、美術館開館に向けた収集活動を次のようにも語っている。「美術館をつくれといわれるのですが、一点億単位の絵を今横浜市が買い入れていけるはずないんです。ですからギャラリーで若い人たちが展覧会をやったりする中で、これだと思う方には話をして寄贈してもらったり、あるいは安く買い入れて、その人が将来どのくらい伸びるかに賭けているんです。そういうものはたまっていますね。」

**表1 1960年代の横浜における美術館構想—横浜美術館コレクション展
「ヨコハマ・ポリフォニー：1910年代から60年代の横浜と美術」補論 略年譜**

本表の「横浜における美術・都市計画の動向／横浜ゆかり作家の主な動向」の項は「横浜美術関連略年表」「横浜美術風土記」（横浜市教育委員会、1982年、125-175頁）を主に参照した。特記事項のない限り、継続的な展覧会は第1回展の情報のみ記載した。

西暦	和暦	横浜における美術・都市計画の動向／ 横浜ゆかり作家の主な動向	美術、社会の主要な動向
1910	明治43		4月、『白樺』創刊。
1912	明治45/ 大正元		6月、旧白馬会の中沢弘光、三宅克己ら光風会創立。 6月、岡田三郎助、藤島武二、本郷洋画研究所設立。 10月、高村光太郎、岸田劉生、川村信雄らヒュウザン会結成。
1915	大正4	9月、五姓田義松没。	6月、伊東深水ら郷土会結成。 10月、岸田劉生、木村荘八、椿貞雄ら草土社創設。
1916	大正5	5月、初代宮川香山没。	5月、鎗木清方ら金鈴社結成。 11月、長谷川潔ら日本版画倶楽部結成。
1917	大正6	7月、開港記念横浜会館（現・横浜市開港記念会館）開館。	8月、大倉集古館開館。
1919	大正8	12月、第1回横浜美術展覧会開催（会場：開港記念横浜会館／主催：横浜市）。洋画部のみ。以後、1923年の第5回展まで継続開催。	9月、帝国美術院創設。 10月、第1回帝国美術院展覧会（帝展）開催。
1920	大正9	5月、第2回横浜美術展覧会（会場：開港記念横浜会館／主催：横浜市）で日本画部を新設。	10月、ロシア未来派画家ヴィクトール・パリモフ、ダヴィド・ブルリユーク来日。
1923	大正12	5月、第5回横浜美術展覧会（会場：開港記念横浜会館／主催：横浜市）では、審査員に下村観山、岡田三郎助らを迎える。 9月、関東大震災。	5月、第1回春陽会展開催。 7月、マヴォ結成。
1924	大正13	9月、中島清之、第11回院展初入選。 11月、川村信雄らにより横浜美術会発会。	2月、『アトリエ』創刊。 10月、三科造形美術協会結成。
1925	大正14	6月、第1回横浜美術展覧会開催（会場：桜木町駅前仮市庁舎跡／主催：横浜貿易新報社）。以後、1930年の第5回展まで継続開催。 6月、仏蘭西現代絵画展開催（会場：桜木町駅前仮市庁舎跡／主催：日仏芸術社）。 この年、川村信雄が弘明寺に転居。翌々年に自宅併設の画塾を開く。	5月、築地小劇場にて前衛劇「劇場の三科」上演。
1926	大正15/ 昭和元	この年、第1回津登比会開催（会場：野澤屋）。中島清之ら市内在住の日本画家が結成。 この年、第1回浜交会開催（会場：野澤屋）。加山四郎、岩田栄之助ら出品。	3月、国画創作協会第2部（洋画）設置。 5月、1930年協会結成。 5月、東京府美術館開館。
1928	昭和3	6月、第3回横浜美術展覧会（会場：横浜貿易新報社屋講堂／主催：横浜貿易新報社）でロダン《鼻の潰れた男（ビビの肖像）》を特別陳列。 この年、加山四郎、第6回春陽会で春陽会賞受賞。	7月、国画創作協会第1部（日本画）解散、第2部（洋画）は国画会として再スタート。椿貞雄、河野通勢ら参加。
1930	昭和5	5月、下村観山没。 9月、片岡球子、第17回院展初入選。	11月、大原美術館、倉敷に開館。 11月、独立美術協会創立。
1931	昭和6	3月、松島一郎ら独立美術協会系の洋画家たちにより横浜新興洋画研究所設立。	1月、日本版画協会結成。 9月、満州事変。
1932	昭和7	10月、第1回横浜美術展覧会（通称・横展）開催（会場：興産館／主催：横浜市、横浜美術協会）。以後、1941年の第10回展まで継続開催。	5月、前衛写真雑誌「光画」創刊。

西暦	和暦	横浜における美術・都市計画の動向/ 横浜ゆかり作家の主な動向	美術、社会の主要な動向
1933	昭和8	5月、加山四郎滞欧作品展開催(会場：興産館)。 10月、第2回横展(会場：興産館／主催：横浜市、横浜美術協会)で、写真部が隣接した会場で作品展の開催を始める。	3月、京都市美術館開館。 12月、名取洋之助ら日本工房創立。
1938	昭和13	11月、第7回横展開催(会場：開港記念横浜会館／主催：横浜美術協会、横浜芸術写真協会、横浜市防衛部)。 入選作品を出動軍人後援会へ寄贈。	9月、二科の前衛派によって九室会結成。 この年、瀧口修造ら前衛写真協会結成。
1939	昭和14		9月、第二次世界大戦開戦。滞欧作家の帰国相次ぐ。 この年、国画会第14回展に福原信三、野島康三らが写真部新設。
1941	昭和16	3月、第1回彩友会展開催(会場：尾上町朝日ビル)。独立美術協会系の松島一郎、兵藤和男ら出品。以後、第3回展まで継続開催。 11月、第10回横展開催(会場：横浜商工奨励館／主催：神奈川県文化翼賛連盟、横浜美術協会、横浜芸術写真協会／後援：神奈川県、横浜市、大政翼賛会県市支部、横浜商工会議所、湘風会)。	12月、太平洋戦争開戦。
1942	昭和17	11月、横展は廃止となり、横浜美術家連盟は解散、横浜市翼賛美術連盟結成。 この年、井上信道、第7回新制作派協会展で新作家賞受賞。	5月、大日本美術報国会結成。東方社、『FRONT』創刊。 12月、東京府美術館にて第1回大東亜戦争美術展開催。
1945	昭和20	5月、横浜大空襲。	8月、広島、長崎に原爆、終戦。 9月、二科会再建。 10月、大日本美術報国会解散。 この年、美術家の節操論争起こる。
1946	昭和21	6月、第1回ハマ展開催[招待展](会場：本町国民学校講堂／主催：横浜美術協会、横浜市教育委員会)。以後、現在まで継続開催。 11月、第2回ハマ展開催[公募展](会場：旧女子専修学校講堂)。横浜芸能コンクール絵画展として開催。	3月、第1回日本美術展覧会(日展)開催。 4月、日本美術会創立。 9月、再興院展復活。
1947	昭和22		2月、女流画家協会発足。
1948	昭和23	11月、第4回ハマ展(会場：YMCA体育館)にて日本画、洋画、彫刻部門に加え、写真部が設置される。	1月、『美術手帖』創刊。
1949	昭和24	8月、神奈川県に美術館建設計画。貿易博覧会跡野毛科学館が建設予定地となる(1951年に鎌倉に開設)。	2月、第1回日本アンデパンダン展(1957年に読売アンデパンダン展に改称)。 5月、東京美術学校と東京音楽学校を統合し、東京藝術大学発足。
1950	昭和25	3月、神奈川県美術家懇話会発足。伊東深水、鍋木清方、安井曾太郎、高間惣七ら参加。 4月、第1回神奈川アンデパンダン展開催(会場：貿易博覧会跡野毛科学館／主催：神奈川新聞社)。山中春雄、兵藤和男らが企画に参加。 10月、横浜国際港都建設法施行。	9月、モダンアート協会結成。 この年、土門拳、リアリズム写真を提唱。
1951	昭和26	4月、第2回神奈川アンデパンダン展開催(会場：湘南デパート／主催：神奈川新聞社)。同展は第2回展で解散、終了。	8月、実験工房結成。 10月、第1回サンパウロ・ビエンナーレにて日本が戦後初の国際展参加。 11月、神奈川県立近代美術館開館。
1952	昭和27	9月、片岡球子、第37回院展で院賞(大観賞)受賞。 9月、江見絹子、第7回行動美術展で行動美術賞受賞。	1月、ブリヂストン美術館開館。 12月、東京国立近代美術館開館。
1953	昭和28	5月、初のハマ展会員によるハマ展春季小品展を開催。以降、春は会員展、秋は公募展の形式により継続。	9月、二科会に絵画部、彫刻部、デザイン部に並び写真部新設。

西暦	和暦	横浜における美術・都市計画の動向/ 横浜ゆかり作家の主な動向	美術、社会の主要な動向
1954	昭和29	6月、第1回全神奈川アンデパンダン展開催(会場：横浜松屋／主催：神奈川県美術協議会)。以後、1963年の第10回展まで継続開催。 11月、鍋木清方、文化勲章受章。 この年度、横浜美術協会、第3回横浜文化賞受賞。	7月、具体美術協会結成。
1955	昭和30	9月、ワシントンのコーコラン美術館でイサム・ノグチと岡田謙三の二人展開催。 10月、森兵五、第23回独立展で独立賞受賞。	11月、ル・コルビュジエ来日。
1956	昭和31	7月、神奈川県日本画協会発足。片岡球子、中島清之、小島一谿、牛田雞村ら参加。 9月、第1回国展ハマグループ展開催(会場：有隣堂ギャラリー)。中村好宏、錦古里孝治、安藤不二夫ら国画会の絵画部と写真部でハマグループを結成。以後、毎年有隣堂ギャラリーで展覧会を開催。	6月、棟方志功、第28回ヴェネチア・ビエンナーレで版画大賞を受賞。 12月、吉原治良、「具体美術宣言」を『藝術新潮』に発表。
1957	昭和32	2月、新進大家美術工芸展開催(会場：有隣堂ギャラリー／主催：神奈川県美術振興会)。伊東深水、片岡球子ら出品。 10月、第1回太平洋神奈川展開催(会場：全日本海員会館)。川村信雄ら出品。 10月、第1回青紅会開催(会場：野澤屋)。中島清之、牛田雞村、小島一谿らが参加。翌々年の第2回展後、1967年まで継続開催。 この年、「横浜国際港都建設基幹計画」を横浜市が発表。	2月、第9回読売アンデパンダン展で九州派、具体らの活躍。 6月、第1回東京国際版画ビエンナーレ開催。 この年、アンフォルメル作家ジョルジュ・マチュー、サム・フランシスら来日。
1958	昭和33	1月、第1回神奈川独立展開催(会場：有隣堂ギャラリー)。松島一郎、高間惣七、志村計介ら出品。 3月、木下孝則、第6回横浜文化賞受賞。 6月、岡田謙三、第29回ヴェネチア・ビエンナーレで受賞。 8月、第1回沢百合会洋画展開催(会場：野澤屋)。県内在住の有島生馬、木下孝則、高間惣七、志村計介、遠藤典太ら出品。第9回展まで継続開催。	3月、社団法人日展発足。 4月、ミシェル・タピエの企画で新しい絵画世界展—アンフォルメルと具体開催。 9月、具体美術協会の展覧会がニューヨークを皮切りに各地に巡回。
1960	昭和35	1月、高間惣七、第8回横浜文化賞受賞。 8月、神奈川県女流作家展開催(会場：P画廊)。江見絹子を中心に、県下女性洋画家13名、彫刻家1名参加。 10月、斎藤義重、グッゲンハイム国際美術展で優秀賞受賞。同展には江見絹子も出品。	4月、第1回ネオダダイズム・オルガナイゼーション展開催。
1961	昭和36	3月、片岡球子、第11回芸術選奨文部大臣賞受賞。 4月、神奈川県女流美術家協会結成。江見絹子、竹中恵美子ら13名参画。 9月、斎藤義重、第6回サンパウロ・ビエンナーレで日本人として初の国際絵画賞受賞。 10月、第1回神奈川県女流美術家協会展開催(会場：横浜高島屋)。 10月、林敬二、第29回独立展で独立賞受賞。 11月、片岡球子、第46回院展で文部大臣賞受賞。	
1962	昭和37	9月、第1回県展開催(会場：横浜高島屋／主催：神奈川県美術家協会)。 11月、山中春雄没。	3月、第14回読売アンデパンダン展にて東京都美術館が「陳列作品規格基準要項」を制定し、作品撤去問題が噴出。 10月、山手線事件。先鋭的ハプニングの展開。

西暦	和暦	横浜における美術・都市計画の動向/ 横浜ゆかり作家の主な動向	美術、社会の主要な動向
1964	昭和39	4月、横浜市民ギャラリー開館。 6月、第1回今日の作家展開催(会場：横浜市民ギャラリー)。針生一郎他9名の横浜現代美術館開設準備委員による企画。以後、2004年まで継続開催。 7月、第1回全日本アンデパンダン展開催(主催：神奈川県美術協議会、全日本アンデパンダン展運営委員会/会場：横浜市民ギャラリー)。 10月、「横浜国際港都建設総合計画 福祉計画(素案)」が作成される。 11月、有島生馬、文化功労者となる。 12月、浅田孝、田村明らにより「横浜市将来計画に関する基礎調査報告書」が作成される。	1月、読売新聞社、読売アンデパンダン展中止を通告。 1月、赤瀬川原平、紙幣模造容疑で任意出頭。 8月、長岡現代美術館開館。 10月、東京オリンピック開催。
1965	昭和40	この年、飛鳥田一雄市長が横浜市六大事業の提案を行う。「横浜国際港都建設総合計画」策定。 この年度、川村信雄、第14回横浜文化賞受賞。	5月、MoMAの企画による日本の新しい絵画と彫刻展が全米7館巡回。
1966	昭和41	9月、岡本太郎展開催(会場：横浜市民ギャラリー/主催：横浜市、読売新聞社)。	11月、空間から環境へ展開催。 この年、山種美術館、出光美術館など企業美術館の開館相次ぐ。
1968	昭和40	11月、川村信雄没。	11月、もの派の先駆けとされる関根伸夫《位相-大地》が発表される。
1969	昭和44	3月、「横浜国際港都建設中期計画」が作成される。美術館建設が計画より除外される。 10月、中島清之画業50年回顧記念展開催(会場：横浜市民ギャラリー)。	8月、箱根彫刻の森美術館開館。

A Plan for Creating a Museum in Yokohama in the 1960s – Addendum to *Yokohama Museum of Art Collection, Polyphony : Artists and Yokohama in the 1910s-1960s*

Katada Yuko

(Curator, Yokohama Museum of Art)

In this paper, I begin by summarizing *Polyphony : Artists and Yokohama in the 1910s-1960s*, an exhibition drawn from the Yokohama Museum of Art Collection, which was held at the museum from November 2020 to February of the following year, prior to the facility's long-term closure while undergoing a renovation. I supplemented this with information on the concept behind the Yokohama Museum of Contemporary Art (conceived but not realized in the 1960s), a subject that was not sufficiently addressed in the exhibition. I also considered the extent to which the concept of the museum was planned in regard to the City of Yokohama's policies, and how it relates to the Yokohama Museum of Art, which opened in 1989.

Based on a 60-year time frame, the exhibition focused on Yokohama and artists with links to the city while retracing their activities chronologically. This shed light on the diverse range of creative expressions linked to major trends in Japanese art history (which has tended to be centered on Tokyo) that emerged in Yokohama. This also demonstrated that after the formation of the Yokohama Bijutsu Kyokai (Yokohama Art Association) in 1919, the artists continually sought places to show their works in various forms as part of their unceasing creative activities.

In the latter half of the paper, I trace the lineage of a plan to create the Yokohama Museum of Contemporary Art based on magazine and newspaper reports that appeared in 1964. The idea was conceived by Yokohama's then-mayor Asukata Ichio, and corresponds with a plan to establish a museum as stipulated in the "Welfare Plan (Draft)" contained in "A Comprehensive Plan for the Construction of Yokohama International Port City," which was drawn up by the City in October 1964. Although the proposal to build the museum was excised from the plan in 1969, it was subsequently linked to "Six Spine Projects," an urban development project the mayor proposed around the same time, which eventually led to the realization of the Yokohama Museum of Art in the 1980s.

Although the idea of creating the Yokohama Museum of Contemporary Art was abandoned in the 1960s, it is possible to see the City's revised concept of the museum as an auxiliary to the urban development plan between the 1960s and the 1980s as a kind of continuity. By drawing on the museum collection, the *Polyphony* exhibition presented an overview, divided into various eras over the 60-year period, of artists whose work exemplified a free and open spirit that was cultivated in the open port of Yokohama, which served as a window into other cultures. Moreover, in this paper I ascertained the evolution of the museum concept that first emerged in the 1960s. As a result, I was able to reaffirm the fact that the Yokohama Museum of Art, as a product of this cultural climate, is an organization that has been fostered by a wealth of creative activities by artists while also functioning as an archive of memories and a transmission device for art in Yokohama.